

「混血児」のメロドラマと占領の記憶

—金子和代『エミーよ 愛の遺書』(1954) 論

鈴木貴宇

本稿は、1954年に刊行された手記『エミーよ』を題材に、占領終結直後の日本社会において、混血児及びその母に向けられたジャーナリズム上での関心を考察するものである。本書は占領期に黒人米兵との間に子供を儲けた女性の手記であるが、そこで語られる二人の関係は、社会的、時代的な制約を超えた普遍的な愛だと強調されるものとなっている。本稿では、その語りをメロドラマ的なものと定義し、その背後にある社会的規範、特に敗戦国の女性が戦勝国の兵隊と性的関係を持つことへの抵抗、さらに「混血児」の所属先を巡る国籍の問題といったものが、情緒的な語りによって不可視化されていく様態を指摘した。また本書は出版されるまでに毎日新聞記者、混血児問題のキーパーソンであった沢田美喜の関与が重要な役割を占めており、作者である金子和代という一女性の経験が、ジャーナリズム上で「愛の遺書」として流通されるに至り、どのような表象化が彼女に投影されていくかを考察した。